

出雲 高尾ひとみ

国際化を学ぶ研修所で三か月寝食を共にした仲間が、出雲で同窓会を持ちました。数えてみると、ちょうど三十年前。顔を見てわかるだろうかと心配したのも束の間、足立美術館では庭に臨むベンチで話し込み、夜は昔のままに飲み、歌いました。

翌日は、地元の人々の誘いで出雲大社の正式参拝です。お祀りする大國主大神様は、生きたし生けるものがとても豊かに生きるよう、結びつけてくださるといいます。その温かな御縁を心に刻んだ出雲でした。

八雲立つ出雲に吹けり青田風

穴道湖にまだまだ高き大西日

それぞれの三十年や星涼し

国引きの漁に夏日の容赦なく

車椅子押す白シャツの背の広き

紹袴の神官に真榊を受く

涼風や楼門に友垣と居り

磐座にそつと手を置き夏惜しむ

斐伊川の風にゆれをり稲の花

また会はむ旅の終りの大夕焼

《作品鑑賞》 井藤希
三〇年ぶりの同窓生たちとの旅。少し不安でもあるのだが、会えばすぐに昔に戻って打ち解けるのが嬉しい。この同窓生たちと巡る出雲は格別な夏の思い出となったに違いない。そのような心情が真直ぐに伝わってくる高尾さんの作品である。

八雲立つ出雲に吹けり青田風

「八雲立つ」の枕詞で出雲の歴史の深さとダイナミズムが一言に迫ってくる。その中で青い稲が風に揺れているという、静かだが生き生きとした今の風景に旅への期待感が高まる。古来より人々が営々として築いてきた出雲国への賛歌とも思える句である。

車椅子押す白シャツの背の広き

「白シャツの背の広き」が味わい深い。出雲大社での参拝の光景だろうか。雲に分け入ると詠われた大社に参拝する車椅子とそれを押す大きな背中、夏の光りの中の森厳な風景が見えてくるようである。

磐座にそつと手を置き夏惜しむ

旅の終りでもあり夏の終りでもある。多くの思いが去来する中で作者は敬虔な気持ちで磐座に触れてみる。「そつと手を置き」に過ぎ去ろうとしているものへの愛惜の思いが静かに伝わってくる。